

コラム

《腰折れ文》十二

渡邊澄子（会員）

近年の大事事件と言ったら米朝首脳会談に決まりだろう。事前にはジグザグはあったが、まずは米朝融和の機運が生まれたことは喜ばしい。だが、朝鮮戦争終結問題は未解決のまま。世論は歴史的会談の成果に冷ややかだ。新聞等から得る情報による両首脳の人柄は好きになれず、信頼性にも欠けるので私も「世論」派だ。でも、米韓合同軍事演習は中止され、核開発は中止されたらしいから実りはあったといえるだろう。

このチャンスで日本は活かせるのか。安倍氏は、北の非核化費用の負担に加えて、会談が額面通りなら、必要ないはずの二千億円以上もする「イージス

艦」を米国から買うことになるのだろうか。「働けど、働けど」生活困窮の自国民より、経済問題が第一のトランプ氏のポチで在り続ける方が大事なのだろうか。金喰い虫の駐留米軍を韓国から撤退させるらしいが、米軍専用施設を七割以上も七十年にもわたって押しつけられ、絶え間なく派生する事件・事故・騒音はじめ自然・環境破壊の沖縄の現状をなくすことが先決だろう。日米の為政者は、せめて一か月だけでも沖縄で生活してみるのがいい。体験したら、「ひとつと」意識が変わるのではないだろうか。

六月二十三日は、二十万人超の命を奪った地上戦から七十三日目を迎えた「沖縄慰霊の日」

だった。『琉球新報』が連日伝え、教えてくれる沖縄戦の阿鼻叫喚は想像力も届かぬもどかしさで苦しい。平和祈念公園で営まれた「沖縄全戦没者追悼式」で、翁長知事は、米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設阻止を貫く強い覚悟を闡明された。がんと手術されて療養中とのことだが、少しは白いのが混じっていてもまだ黒々としていた毛髪が短く真っ白になっていて胸をつかれたが、背筋をしゃんと伸ばして気魄少しも衰えぬように見え、涙ぐまれた。米朝首脳の見え、涙ぐまれた。米朝首脳の見え、涙ぐまれた。米朝首脳の見え、涙ぐまれた。米朝首脳の見え、涙ぐまれた。米朝首脳の見え、涙ぐまれた。

この日、世界文学会で李恢成についての講演をした。在日一

動達成に微力を尽くしたい。

世と二世、さらに三世・四世では人生が全く異なる。李恢成は一九三五年、樺太の真岡（現ホルムスク）生まれの二世である。本協会企画の樺太旅行に参加した時の衝撃は忘れられない。大日本帝国の植民地時代の彼は日本人以上に「皇国少年」になるために努力し、創氏改名した日本人として生きながら、藤村の『破戒』の丑松の苦悩に苦悩し続け、終戦でソ連軍とGHQに振り回され、大学卒業は二十六歳時。戦時下の「天皇制ファシズム」から戦後の民主主義への急変に戸惑うなかで朝鮮戦争による国土二分で、父母の出身地が南北に分かれるため帰国不能になる。外国人芥川賞受賞者は李恢成が初めてだが、彼の文学の心髄は「北も南もわが祖国」と「土着の社会主義」だろう。在日二世の苛酷なパルチャ（運命）が彼を優れた作家にしている。世界文学会から李恢成論を依頼されてしまった。